
環境セッションの概要

コーディネーター 榎根 勇

環境セッションのねらい：ねらいは「中国と東アジア世界の生態環境問題——持続的発展と環境問題をめぐる方法的アポリア（難題）」を解くことにある。そのための方法として、本セッションでは「環境改善技術の体系化」を提案した。コーディネーターによる方法論の試論は、本報告書の榎根論文に示してある。本セッションの発表と質疑はこの方針（ねらい）の下で行われた。

環境問題の具体例：中国が直面している環境問題を考えるために、具体的な地域として黄河流域、華北地区海河流域、内モンゴル草原地域、内陸のオアシス地域、武漢市が取り上げられ、断流、洪水、土壌浸食、砂漠化、地下水の過剰揚水、水資源の脆弱性、生物多様性、酸性雨、大気汚染、水質汚濁、土壌改良など、多様な問題について報告がなされた。これらの環境問題の原因が地球温暖化と人間活動にあることは明白である。先進工業国が経験したと同じ環境問題が中国でも起きていることが明らかにされたが、中国独自の問題も見られた。

巨大プロジェクト：中国では、経済発展のための三峡ダムや南水北調などの巨大建設プロジェクトが承認され、すでに実行に移されつつある。環境研究についても、中央政府主導の巨大研究プロジェクトが実施されている。また国威発揚のための有人宇宙船も打ち上げられた。巨大建設プロジェクトについては、それらの施設の建設が環境に与える影響の不確定性（uncertainty）が、巨大研究プロジェクトについては個人レベルの研究との関連や政策とのリンクが、また有人宇宙船についてはその意義、環境改善のための税の支出、また日本からのODAとの関連が議論された。これらはいずれも中央政府の政策決定と今後の環境研究の進め方に関係する重要な問題である。

三農問題：農民、農村、農場の農業生産のいわゆる三農問題は、中国ではまだ適切に解決されてはいない。都市と農村の経済格差や人口の差は依然として大きく、その解決には政治、経済、環境、科学技術のすべてが関係している。オアシス地域や草原地域の環境破壊の直接的原因は、人口増加に起因する過開墾、森林伐採、過放牧などの人間活動そのものであり、廃棄物や化学物質による汚染が主原因である都市部の環境問題とは性質が異なる。農村を富ませることが、環境問題の解決にも重要であることは、参加者の共通意見であった。このことは、環境問題への対処にあたって、総合的・俯瞰的視点が重要であることを示唆している。

人口圧力と経済成長圧力：フロアの経済学者より、経済成長と生態環境保護の間には矛盾が存在すること、巨大な人口圧力と成長圧力は環境問題の解決に大きな衝撃をもたらす

であろうことの指摘がなされた。また中国の経済が年々7%もの高度成長を続けることは、環境問題から見て不可能ではないかとの指摘もフロアからなされた。この問題は本セッションのねらいとして上に述べた「方法論的アポリア」そのものである。自然科学者が環境の研究だけをしていたのでは、環境問題は解決しない。ここでも文理融合や、総合的・俯瞰的視点の重要性が確認された。

環境改善技術：環境を改善するための具体的な技術が、本報告書の定方論文に「トンネルルート」として述べられている。草地地域では、草地生態系の復元と保護のための具体的な提案が示されている。海河流域では「健全な水循環」の概念の適用が検討されている。武漢市では、UNDPが支援する持続可能な発展プロジェクトが実施され「比較的成功」している。種々の環境規制が実施されており、罰則も強化されている。このように中国でも環境保護の動きは確実に高まっている。

政策論の必要：「人と自然の調和」「持続可能な発展」「健全な水循環」「総合的・俯瞰的視点」「文理融合」「5つのR」「循環型社会」などの必要性については、中国でも議論されている。これらを具体化し、環境保護につなげるためには、より良い環境を実現するための「環境政策」と「制度 (Institution)」が必要になる。環境政策や制度の問題は、今回のシンポジウムでは取り上げなかったが、参加者がこの問題に大きな関心を持っていることが討論の過程で明らかになった。次回以後のシンポジウムではこの問題も取り上げることにしたいと考えている。

ボトムアップとトップダウン：環境研究を行う際にも、環境政策を実行する際にも、一般論としては、上からのアプローチと下からのアプローチの調和が必要であることは広く認められている。中国の現在の政治体制はトップダウン型であり、大型プロジェクトの立案や実行は比較的容易に行えるという利点がある。一方、環境問題は複合的で、しかも地域性が強いので、トップダウンの視点だけでは対処の難しい問題も多い。この問題に触れた報告や、フロアからの質問も多数あった。住民参加、オアシスの少数民族問題、環境情報の公開、自治性の問題、市場性の問題など、政策や制度とも関連するこれらの問題は今後の課題として残された。

価値観の問題：環境問題は、基本的には、「自然と人間の関係は如何にあるべきか」という価値にかかわる問題である。今回のシンポジウムでは、きれいな空気や水など、モノとしてのサービスを提供してくれる自然の価値についての発表や質問はあったが、「なぜ自然を保護・保全しなければならないのか」という哲学や倫理に関わる問題は話題に上らなかった。デカルト的二元論に立つ近代科学は、価値に中立的であることによって、普遍性と合理性を確保してきた。しかし、環境問題は価値に関わる問題であり、個人の主観性に関わる問題である。環境問題を考えるための原点を定めるために、将来はこの点についての議論も必要になると思われる。